HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フランシス・ベイコン研究（二）：根本思想について
Author(s)	花田, 圭介
Citation	北海道大學文學部紀要, 13(1), 1-26
Issue Date	1964-12-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33292
Type	departmental bulletin paper
File Information	13(1)_P1-26.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

フランシス・ベイコン研究（二）

――根本思想について――

花田圭介

フランシス・ベイコン研究（二）

——根本思想について——

Neque postulandum est ut ejus judicio
stetur, quae ipsa in judicium vocatur.
—Francisci de Verulamio
Instauratio Magna, Præfatio.

花田圭介

かなり個人的な好悪の情をまじえた過去の数多くのベイコン書のことは問わないまでも、最近のアンダーソン、シュール、ファリントン、サコロフの実証的・理論的な研究によって、ベイコンの学説内容の諸部分が整理され解明されてきている。*Novum Organum* ももはや帰納的方法の狭い視野からではなく「時の娘」としての *Instauratio Magna* の枠内で理解されることが常識となっている。しかし、一方では魔術やラムス論理学との関係などについての貴重な実証的成果がえられながらも、他方理論的には *Instauratio Magna* の拡大された枠は産業技術の発展という見地から見ることがなお大前提になっているように思われる。つまり、別の言い方をすれば、*New Atlantis* が近代産業技術のモデルによってのみ理解され、それがベイコンによってキリスト教国として画かれていることの意義が解明されないという強い傾向がある。

もちろんわたしは科学技術史に対して宗教史に重点をおいた史観でベイコンを見直そうと企てているものではな

い。むしろ問題をただベイコンの原典中に求めようとしただけである。そこには今までベイコン研究の網の目から落ちることのおおかった、しかしベイコン哲学の根本に係わると思われる二つの問題がある。一つはベイコンにおけるいわゆる知恵の概念を解明することであり、もう一つは――それと無関係ではない――人間の精神の統一性の命題を解釈することである。これらを主題として取り上げたことについては、すぐ後に述べるように、ベイコンを特にルネサンス哲学者として見直そうとしたときのシュールの問題に刺戟されている。

今回発表できる部分は、しかし、まだそれらに解決を与えるところまではいっていない。その理由の一つは、ベイコン自身自分の哲学についていっているように、それはまだ体系化の段階に至っていないアフォリズムであるために、わたしもまた、それに応じてアフォリズム形成の発想を追うという方法をとらなければならなかったからであり、もう一つは、伝記の物語っていた当時の強いカルヴィニズム的傾向が意外にベイコンの学説形成と連関しており、ベイコン研究に必要な限りでも――いな、かえってその故に――やや特殊な補助研究が必須となったからである。

1・1 シュールの問題が出されたのはベル H. Berr (Directeur du Centre International de Synthèse) が司会し、まずコワレ A. Koyré (École des Hautes Études) によって「ルネサンスの科学的寄与」と題して、次いでシュール P.-M. Schuhl (Sorbonne) によって「ベイコンの役割」と題して、それぞれ基本報告が行なわれ、最後にそれらをめぐり故ブレイエ É. Bréhier を始めとして数名が参加した討論会においてである。記録は、*La Synthèse, Idée-force dans l'évolution de la pensée* (1951) にある。

そこでシュールが与えている結論的な評価は、ベイコンの世界はまだ多少とも「科学以前の世界」であったが、そ

こには「思想の一般的な枠組に真の革新をもたらすあらゆる示唆」がすでに現われている、というものである。また、それのもつ影響力については、一七世紀を通じて「世界の発見」を促進しつづけ、ロンドンの英国学士院（Royal Society）創設（一六四五年設立、一六六二年認可）とフランスの『百科全書』*Encyclopédie*（1751～1780）の編集との遠因として働いたことに求められる。これらの評価はいずれも特に目新しいものではない。また、シュールは報告の性質上「ベイコンの思想の大きな線」だけを太く画き出し、「残りのそれほど重要でない」部分は項目の列挙にとどめている。[1] 主要な線だけによる、それほど目立たないベイコン像のデッサン。これは本論の入口に掲げるのに最適のものであろう。

コワレがガリレオとともにわれわれはルネサンスから抜け出るとしたのに対して、シュールは「ベイコンとともにふたたびある程度ルネサンスに立ち帰る」という。シュールは、この感情的に無関心でありにくい、しかも詳細な哲学学説史からもはみだしがちな大哲学者ベイコンの人物と思想とにおいて本質的なものを、かれの学説よりもむしろ「精神の一般的な態度」の革新性に求める。現代でもなお響く力を失っていないかれの著作の魅力はルネサンス期の偉大な発見と探検との響きであって、かれは実に「ルネサンスの相続人」である。ルネサンス人である。シュールが何よりもまずベイコンに認めるものは、ラヴェソン RAVAISSON の『フランス哲学一覧』*Tableau de la philosophie française* を受取ったときにミシュレ MICHELET がいったという「近代世界が強調するところの、行動の新しい価値」である。[2] この「行動の新しい価値」観から、それまでの学問に対して他の誰もが出しえなかった諸問題が提出された。ベイコンにおいて際立っているのは、この「他のことが可能である」（*autre chose est possible*）という態度である。さまざまの発明と発見とを反省することによって、ベイコンは「総合（synthèse）でも体系（système）で

もない」ところの「知識の分類（classification）」に到達した。[3] シュールによれば、哲学思想史上重要な役割を果したのはまさにこの分類であり、それはフランス『百科全書』以前の一時期を画したほどのものである。「行動の人」ベイコンは、諸知識の過去および未来の収穫高を調査測定し、それまでの哲学の戦場を一瞥して「教条主義者、理性主義者」「経験家」「懐疑派」のいわば戦法の効力を察知し、それらの方法に無力を感じた。他の方向と方法とが探求されなければならない。ただしここで求められている方向が「当時実用的に働いていた方向」ではなかった点にシュールは注意している。[4] それは「前進の方法」であって、ベイコンはこの点では優に一七世紀人である。この方法は、人間精神の諸機能に係わるものであって、学問の分類が記憶・想像・理性にしたがって大別されたのも、それによる。シュールは、ベイコンにおける建てられるべき精神の統一性の主張に第一のアクセントをおき、この「人間精神の統一性のテーゼ」のもつ影響力は現代にまで及ぶほど甚大なものだといっている。[5] しかし、諸学のうちで「第一哲学」の名のもとにベイコンの求めたものは、――後にコント A. Comte が自分の体系こそまさにそれだとしたものであるが――ある場合には「自然学と形而上学」とされ、他の場合には「諸学に共通の公理」とされて、定着していない。[6] 因に数学に対しては、ルネサンスの「形而上学的数学」（métamathématique）を危懼して信頼をおくことができなかった。

ところで、この「分類」は分類であるとともに、知識の方法的段階でもある。ベイコンにとって「歴史」は認識の第一段階である経験を意味するが、プリニウスに対抗してかれは、ルネサンス期の雑駁な経験の堆積をすべて *Sylva Sylvarum*[7] として蒐集しようとした。ここで、この蒐集が興味本位の陳列から社会史・文学史なかんづく自然史〔誌〕をふくむ集積に分化発展したことにシュールは注目する。この自然史こそ自然研究――しかも「アリストテレス的意

味における自然」にとどまらず「人間が変革するごとき自然、あるいは不自然なものの場合において自生的にみずから変様するごとき自然」の研究――へ導いたものである。さらに、ベイコンは自然と技術とを対立させることに強く反対し、工芸・技術は系統的に記録するに値するとし、手職の網羅的な表を作った。そこには後年マールブランシュによって評された解剖術などが見られることはもちろん、ロンサールやボーダン、いなジェームズ一世の魔術書（一六〇四年）を連想させるごとき魔術的なものも多く含まれている。自然のなかのすべてを動かさなければならないパンの狩猟は、このような経験の森のなかで、方法の必要を痛感する。しかし、過去の論理学者（dialecticiens）は論文構成術を教えるだけで発明術を与えない。ベイコンのいわゆる学問的経験（experientia litterata）の着想は、この発明術の要求にもとづく。(8)

ベイコンにおいても知識は原因による知識であるが、「原因」の概念が従来とは異なる。ベイコンによれば、アリストテレスの「質料」は議論のための概念でありそのために質料因が誤解された。動力因は発明に役立つとはいえ真の説明を与えるものではなく、また目的因は自然学ができたのちに形而上学のなかで一定の役割を果たすとはいえ自然学では退けられるべきである。シュールによれば、ベイコンは質料因を「形相因」のなかへ置き換えた。しかし、「形相因」の意味内容はスコラとはかなり異なる。それは「自然のアルファベット」という古い思想を継承する「単純本性」（*ἁπλᾶ*）であり、それら諸単純本性のアルファベットの構成が要望される。ベイコンは本質のアリストテレス的規定方法に甘んじないで、それをむしろ処方（recette）として考えた。すなわち、諸物体の構成（schématisme）の分析あるいは形成過程（processus latent）の観察を通じてそれらを造りうる処方ともなりうるメカニズムに達したとき、そのメカニズムを成すものが本質である。ただし、ベイコンのうちにはまたデュナミズムも明らかに

存する。ともかくシュールは「もし人がいかにして物を造るかを知るならば、その人は物が何であるかを知るであろう」という思想をベイコンに帰している。このように知られるべきものは物の究極的実在であって、仮説的説明の意義は認められない。知識の理想の形はピラミッドであって、のちにテーヌ TAINE に受け継がれたように、その頂上に最高の法則が想定された。(9)

ベイコンは自然を法典と見た司法官である。ラランド LALANDE もいったように、近代科学の形成の基礎をなす法則概念は、ベイコンに見られるように、法律の自然への適用から始まる。(10) シュールの報告の概略はほぼ以上のとおりである。

1・2 シュールのベイコン理解には、学問分類の方法的意義・経験記述の方法的分化・自然と技術との連関などの点でさすがに着眼の鋭さがある。しかし、何にもまして以上の報告のもつ特色は、ルネサンスの世界を背景に感じさせ、太くルネサンス人としてのベイコンの肖像を画きながら、一七世紀人への動きの線に大胆にアクセントをおいていることであろう。(11) このようなルネサンス人としてのベイコン像のもつ問題点は、右の報告に先立つコワレの報告およびこれら二つの報告をめぐる討論によってある程度明らかになっている。以下に私見を折り込みながらこれらを整理する。

1・2・1 まず、「ルネサンス」を分析的な一六世紀および総合的な一七世紀に区分するル＝リオネ LE LIONNAIS などの説明法に対して、コワレは、ルネサンスの特徴を「すべてが可能である」(*tout est possible*)(12) という思想に求め、魔術と事実蒐集とをそのメダルの両面であると見なし、これらは一七世紀に科学革命をひきおこした数学的物理学の精神(13)とは根本的に異なるものであるとする。要するに、ガリレオが一七世紀人であるのに対してベイコンは

ルネサンス人である、ということになる。ベイコン像における一七世紀への動きの線はぼかされる。たしかに、ベイコンが当時の数学的天文学を軽視し力学にあまり理解をもたなかったことは、コワレ、ルノーブル R. P. LENOBLE のいう通りであり、また魔術を中世よりもルネサンスの特徴とする見方は一考に値しよう。ベイコンの理論の方向は、自然学に関する限り、ガリレオ力学から出発したデカルトやホッブズと比べてはるかに見定めにくい。しかし、そこからコワレのようにルネサンスからの出口をベイコンが予感さえしなかったと結論することは早計にすぎるのではなかろうか。[14] 少くともコワレの科学史的整理が「思想においては常に可能なるものが実現されるものに先行し実現されたものはその可能であったものの残滓にすぎない」[15]という科学論に制約されていることだけは確かである。

シュールはこの科学論の枠にとらわれない。しかし、ベイコンがどこへ、どのような出口から脱出しようとしているのか、これについてはシュール自身もそれほど明確な説明を与えていない。前述の精神の統一性への方向づけもベイコンが約束の地の一歩手前の山上にいることは分るがその約束の地がどこのどのような土地であるかは不明であるとしている。それに伴って、「学問の分類」、そのなかでの「第一哲学」、法則としての「形相」等々のもつ歴史的意味は、依然としてベイコン研究における問題点であると指摘される。[16]

このようにして、「ルネサンス」から「一七世紀」への転換を日常的・質的世界から幾何学的・量的世界への転換として把えるコワレの universe of discourse に影響されて、討論もベイコン像に真の動きを与えるところまではいっていない。

1・2・2 次に近代科学の量化の一面を認めながらもそれの非人間性に疑問をもつブレイエは、事柄の「裏の一面をも示そう」と希望する。ブレイエには、近代科学と人間性との関係が近代哲学のアポリアであるという史観があ

る。[17] これに答えてシュールはいう。その表裏両面の、「その問題をベイコンは考察した。それだけですでに偉大である。レオナルドと同じくかれもその諸発明の危険をよく感知していた。そしてこれらは明らかに新しい知恵に、すなわち古代人の調和的で賢明な知恵に対立するような行動の知恵に、結びついている。[18]」これに補足してルロワ A. LEROY は、かような意味での質の面はベイコンが諸学をそれらの対象によってではなく人間本性の質によって分類したときに前面にでたものであり、ヒュームが人間本性を基軸にして数学をも説明しようと試みたときに量の面との統一問題があらわになったものであると、かなり特異な説明を加えている。[19]

近代科学と人間性との関係の問題を「量」と「質」とのそれとして提起することは、近代科学の特性を量化としてのみ把えることを前提とするかぎり、検討さるべき多くの先決問題を予想している。[20] しかしながら、古代哲学にすでに「博識」（érudition）と「科学」（science）との二学風を指摘する立場[21]にたつブレイエが、ガリレオにおける「科学」の近代化と併行してその裏面に進行したであろうと想定される「博識」の近代化の過程をベイコンに求めようとすることは、さすがに得がたい着想であるといってよいであろう。なぜなら、「博識」としての人文学と「科学」としての力学との二重性こそはルネサンス哲学史研究の中心問題の一つであるからである。[22] したがって、行動の知恵へのシュールの言及はなお暗示にとどまり、ルロワの「量質の統一」はかなり特異な表現に堕しているとはいえ、貴重な示唆をふくんでいるといえよう。

（1）いわゆるベイコンの表およびそれとミル J. S. MILL の表との異同、方法的前進における上昇・下降の二つの道など、帰納法の細目にわたる部分である。cf. P.M. SCHUHL, *Pour comaître la fensée de Bacon*, 1949〔以下 *Bacon* と略記する〕P. 65—72.

（2）cf. P.-M. SCHUHL, *Bacon*, P. 5—6.

但し、本書では「他のことが可能である」を基軸思想とする「ルネサンスの相続人」という規定は表に出ていない。

(3) これは、司会者ベルが中世スコラ学の「大全」(Summa)を驚嘆すべき「大寺院の石の集合」になぞらえコワレが「位階的総合」(la synthèse hiérarchique) と呼んだことと関連している。

(4) cf. P.-M. SCHUHL, *Bacon*, p. 11—19. ベイコン経験主義の非実用主義的性格については、p. 16—18, 24～25を参照。なお、本書では、これをルネサンスに対する一七世紀的特徴とする規定は表に出ていない。

(5) cf. P.-M. SCHUHL, *Bacon* p. 35—37. 本文にいう「人間精神の統一性のテーゼ」は本書では陰にかくれている。ルネサンスに対する一七世紀的特徴をコワレが数学的物理学を主軸とする科学革命による宇宙秩序の統一に求めたことが、シュールをしてこの「テーゼ」を表にひきださせたように思われる。

(6) cf. P.-M. SCHUHL, *Bacon*, p. 37. 同様の解釈およびコントへの言及が見られる。

(7) 「森また森」「志林」「森林の森林」などと訳される。拙論「フランシス・ベイコン研究（一）」（本紀要、第一一号）七八ページ参照。

(8) P.-M. SCHUHL, p. 39—49. ここでは分類の方法的意義・経験記述の方法的分化・自然と技術との連関の三つの主要な線、およびマールブランシュ、ジェームズ一世などに関する史料について明らかにされており、シュールのベイコン研究の最良の部分であるように思われる。なおコワレは魔術を中世のではなくルネサンスの主要特徴の一つとしている。

(9) P.-M. SCHUHL, *Bacon*, p. 51—63. なお本文中の報告では *New Atlantis* に言及されていないが、本書では第一一章がそれに当てられている。

(10) P.-M. SCHUHL, *Bacon*, p.11. ここでは、一五九一年のバーリー卿宛の手紙などにもとづいてベイコンの法則概念に関する法律家的発想に言及してはいるが、本文に見られるほど断定的ではない。本文中のこの解釈は、諸科学の総合に対する興味ぶかい示唆として、司会者ベルに歓迎されている。ル＝リオネ Le LIONNAIS は、ベイコンの法学的法則概念とガリレオの数学的法則概念とは相照応するものであって、そこに秩序と総合が見いだせるといっている。この論点は科学思想史において論じられているテーマの一つであるが、ここはシュールのベイコン観が主題であるから、これ以上の説明を加えない。

(11) これはシュールの *Bacon*, 1949にはなかったものである。

(12) コワレがルネサンスの特徴とするこの軽信性、迷信性に対して、ル＝リオネは反対し、「すべてが可能である」という軽信は中世の名残りであって一六世紀思想の一面にすぎず、より積極的な「他のことが可能である」が主な面であるという。シ

ュールは「他のことが可能である」に到るためには恐らく「すべてが可能である」ということが必要である、という意見を述べている。

(13) cf. A. KOYRÉ, *Études galiléennes*, 1939—40. なお最近の *La révolution astronomique* (*Histoire de la Pensée*, Ⅲ.) および *Galilée et la révolution scientifique du XIIe siècle* (*Histoire des Sciences—Série D—37.*)で骨子は知りうる。コワレはケプラーに関して、かれが天体運動の正しい軌道を発見しえたのに運動のアリストテレス的概念のために運動の幾何学化に成功せず非力学的原因「力」にとらわれていたという二面性に興味を抱いている。ケプラーのもつこの古い一面との連関においてベイコンの位置づけがなされるのである。「一六〇五年の『学問の進歩』を告発はしまい。しかし、ベイコンはガリレオを読んだのに、何も理解されなかったのである」。なお、ルノーブル R.P. LENOBLE はメカニズム思想とデュナミズム思想とを切り離すべきではないとする論者であるが、かれもベイコンが天体の物理的本性を認識せんとするあまり、数学的天文学の無用視に陥ったとしている。

(14) コワレは当時の自然的魔術・信仰的魔術とベイコンの「大魔術」との区別、およびベイコンにおける迷信と信仰との区別など関連する問題点を吟味していないように思われる。

(15) *La Synthèse, Idée-force dans l'évolution de la pensée*, p. 31.

(16) シュールのベイコン研究は学説分析において本文中前述のいくつかの貴重な結果をえながらも、全体が *Machinisme et Philosophie* 以来の機械文明史観に制約されてベイコンの宗教・倫理思想に対する軽視を伴い、そこから歴史的意味の確定のためには不足が生じているように思われる。

(17) cf. É BRÉHIER, *Histoire de la philosophie*, *tome* Ⅱ, 1, p. 1～42.

(18) cf. P.M. SCHUHL, *Bacon*, P. 6, 27—28.

(19) cf. A.-L. LEROY, David Hume, 1953, p.15—28.

(20) 本文にいう討論は、主問題提出者ブレイエの用語の影響で近代科学と人間性との関係を「量」と「質」との関係として扱う universe of discourse に支配されて、一般にいう存在の質・量関係、およびベイコンの運動の多様性の承認の問題からは遠去かっている。一人ブルナン夫人 Mme PRENANT だけは、化学、生物学の相互作用の概念を援用しながら、一七世紀における運動エネルギーにもとづく量化が新しい質の再導入を伴う、という意見を述べている。

(21) *La synthèse, Idée-force dans l'évolution de la pensée*, L'apport scientifique de l'Antiquité, exposé: É. BRÉHIER.

(22) cf. C. CARBONAR, *Scienza e filosofia di principi del l' età moderna*, 1935.

A. LEVI, *Il pensiero di F. Bacone*, 1925.

両者ともガリレオないしデカルトとの対比においてベイコンに見いだされる差異点の説明をイタリア自然哲学との連関のうちに求めている。このような問題はイタリアにおける包括的なルネサンス哲学研究から自然に生れてきたものであるが、アメリカ科学思想史研究ではかえって意識的に取り上げられている。cf. J.H. RANDALL, JR., Scientific Method in the School of Padua (in: P. WIENER, A. NOLAND (ed.), *Roots of Scientific Thought*, 1957).

2・1 以上のことから、ルネサンス人ベイコン像における最大の問題は多くの線のなかで一七世紀人への動きを示す線をどう引くかにあることが分ろう。「ルネサンス人」「一七世紀人」という規定は必ずしもコワレのようにとる必要はない。行動・魔術・事実蒐集を「ルネサンス的」とし観想・数学的力学・抽象理論を「一七世紀的」とするならば、ベイコンにおける一七世紀的線は動きのないものにぼやけてしまう。[1] そればかりではない。右の図式で割り切ろうとすると、科学史上のケプラーのような人は「ルネサンス人」と「一七世紀人」とのヤヌス二面神 (Janus bifrons)[2]として説明することもできようが、哲学史上の一七世紀ケンブリッジ＝プラトン派のような、「ルネサンス的」とも「一七世紀的」とも説明できない、しかもベイコンとの歴史的関係においても軽視できない思想運動の存在にぶつかる。ケンブリッジ＝プラトン派は行動・魔術・蒐集など「ルネサンス的」なものからはっきりと遠去かっている反面また幾何学的なものより生命・意識的なものにもとづいて有機的自然像を代表していて「一七世紀的」でもない。[3] したがって、ルネサンスから一七世紀への――ここではベイコンの――哲学思想の動きのなかにふたたび立ち帰って、それらを深部から幅広く動かした動因を探り当てる必要がある。前述のようにシュールはベイコンにおける精神の統一性のテーゼに言及し、ブレイエの質問に答えて新しい行動の知恵に触れて示唆的であるが、なお模索の段

階にとどまっていた。[4] これらの正しい解釈を得るためには、一般にベイコン哲学の根本発想の基盤ともいうべきものに立ち戻らなければならない。しかし、それは深部のできごとであるから差当り表面的なできごとから入ってゆこう。そのために本研究（一）[5]が役立つ。

2・2・1　さきに、[6]ベイコンがかなり長期間にわたって政治的野心と学問的志向とのあいだで嘖まれている事実を見た。まず政治的野心についていえば、かれの政治生活の全時期にわたって、ベイコンは何かにつけコウク卿と競り合っている。まずエセックス伯の推輓にもかかわらず検事総長の席をコウク卿に占められたこと、この人によって*Advancement of Learning*が、「学校で読むに値しない。愚者の船に積荷されるべきもの」と酷評されたこと、しかし、次にはコウク卿の司法的独立の立場と国王の絶対主義との抗争においてベイコンが国王側近として栄達をかちえたこと、しかし、それにもかかわらず最後に、議会に返り咲いたコウク卿に指導された勢力によってベイコンの晩年の没落が招来されたこと。ここに見られるのは道徳上の徳（virtus）ではなくむしろ政治家としての運勢ないし幸運（fortuna）にかかわる事柄であるが、ベイコンは幸運獲得のための要件は徳のそれと同様に多数でもありかつ困難でもあると考えた。そして、まだ欠如しているが、いかにして人々に自分の幸運の製作者（Fortunæ suæ Fabri）たりうるかを教えるような学問が「幸運製作」（Fabrum Fortunæ）あるいは「成功術」（Doctrina de Ambitu Vitæ）の名のもとに構想されたのであった。[7] このような着想はイタリア＝ルネサンスに由来すると推定される。すなわち、カスティイォーネの「廷臣論」*Il cortegiano*（1528）やまたある程度までマキアヴェッリの「君主論」*Il principe*（1532）と結びつけることができる。[8] さらに伝記は、若いベイコンがすでにネーデルランドをめぐるイングランド、イスパニア間の争覇をつぶさに観察し、議員としては対イスパニア、スコットランド軍備のための徴税のあ

り方を論じ、またジェームズ治下においてはスコットランドとの合併に尽力し、晩年には大陸の三〇年戦争に対してイングランドのとるべき態度あるいは前者が後者のうちに及ぼした政治的影響について苦慮したこと、を物語っている。[9]

ところで、ベイコンは野心に三種類を区別した（tria ambitionis genera）。すなわち、第一は自国内で高位を望むことであり、第二は人類内で自国の強力を望むことであり、それらに対して第三には最高のものとして、人間自身の、つまり人類の権力と帝国とを諸事物の宇宙のなかに建設し高揚することである。この最後のものは英雄の栄誉ではなくて発明家のうくべき神的栄誉に値するものであり、後悔の念で心を噛むことがない。[10]それは、「無（nihil）であるか、あるいは、自分の功績（meritum）に満足して外の成果（fructus）を求めるべきではないほどのものである」。[11]父の死後グレーズ＝インを根城としてから晩年隠退後イートン＝コリッジに職を求めるに至るまで、[12]ベイコンは常にこの英雄的「成果」と神的「功績」との葛藤に悩まされたと解釈される。権臣エセックスの知遇をえて種々の要職に推挙されていた頃、他方かれは伯父バーリー卿に次のように書き送っているのである。

「名誉を愛する太陽神や、繁忙を愛するジュピターのもとに生れた人としてではなしに（なぜなら観想的な星がわたくしを全く夢中にさせているから）」と述べたのちに、「わたくしの社会目的が控え目であるに反してわたくしの観想目的は広大であることを告白する。というのは、わたくしは一切の知識を自分の領域であると考えており、そして、もしわたくしが二種類の海賊――その一つはくだらぬ論争、弁駁、饒舌によって、他は盲目な実験、聞きつたえの伝承、欺瞞によって、多大の略奪を行なってきている――を追放しうるならば、わたくしは勤勉な観察・根拠のある結論・有益な発明発見をもたらすであろうと思う。この望みは、好奇心であるのか虚栄であるのか、あるいは天性

であるのか、また（好意的にうけとっていただいて）人間愛（philanthropia）であるのか、いずれにせよわたくしの心のなかに固着していて取り去ることができない。」つづけて、「わたくしはあるみじめな本造り、あるいは（アナクサゴラスがいったように）地下深くあるかの真理の鉱山における真の開拓者になろう」[13]。

いわゆる近代経験主義は、このように、名誉（honour）や繁忙（business）の社会目的から自己を独立させた個人的自我のなかで――占星的な表現をとりながら――誕生したのである。これはあらためて見直されてよい点であろう。注意すべきことは、ベイコンが、第三の野心としてあげた哲学はそれが単に国内国際政治とは係わらないという意味で社会目的から独立していると考えられたのではなく、当時、一般に行なわれていた有勢の教職的哲学は「教職の義務と社会生活の便宜に供せられ役立つもの」、現存の社会目的に役立つ「雇人的」なものと判断され、このような哲学とも目的を異にするものとして新哲学が構想されたことである[14]。しかも、この目的の違いは、学問内容において原理のみならず証明方法の根本的な差異をも伴うものであったので、自分の立場の説得のために他を「論破しようとしてもむだである」と考えられたほどであった[15]。

2・2・2 しかし、それの観想する領域は広大であった。それまでの既知の領域を遙かに越えて文字通りの新世界の発見にいわば知的新世界の到来が相応ずる時が来ていた[16]。

「物質的球体のひろがり、すなわち陸地、海洋、星界のひろがりがこんにち広大に開かれ明らかにされているのに、知的球体の限界が昔の人の発明の狭さのなかに閉じこめられているとしたら、それは人間にとって恥辱ではあるまいか[17]。」

ベイコンによれば、人々が「もっと遠くへ」（ad ulterius）突き進もうとしない限り学問にも宿命的な「ヘラクレス

の柱」があるが、[18] 今や、預言者ダニエルのことば「多くの者はあちこちと探り調べ、そして知識が増すであろう」のとおり航海と学問とが同時に成就されようとしている時である。[19]「真理は時の娘」であり、かれ自身早くから自分の学問計画を『時の最大の生産』と名づけたことについては、すでに述べた。[20] ベイコンの "Ad ulterius" は、イスパニア王ついでドイツ皇帝となったカルル五世の軍事上の "Plus Ultra" から英国学士院派グランヴィル J. GLANVILL の自然科学上の *Plus Ultra* (1668)[21] に到る、その中間にたつ転換の時をあらわす表現と考えてよかろう。古くから定められた「運命の柱」よりより「遠くへ」行くことは、今やベイコンにとって——そしてそれ以後——人間の傲慢を意味するものではない。「人間の知性は、いやしい消滅的なものに夢中になっていると見られたくないという僭越 (arrogantia) と傲慢 (fastus) とから、経験の光を退ける。[22]」伝統の学問の方こそが「気まままの学」(ad quod vult scientia) であり、学問に宿命的な限界を定める「運命の柱」こそ人間の傲慢のしるしなのである。[23] したがって、「傲慢に人間精神の小部屋のうちにではなく、敬虔により大なる世界のうちに学を求めねばならない。[24]」知識において人間の越えてはならぬ謙遜の限度を示すものとしての「ヘラクレスの柱」が人間の僭越から定められた傲慢の標識へと転換したこと、それに伴って知識の地球における未知の大陸への航海が人間の慢心よりもむしろ敬虔を示す行為へと転換したこと、ベイコンにおけるこの価値の転換はあらためて重視されてよい点であろう。[25] ベイコンは、このようにして、学問における人間の傲慢を戒め、世界の存在に対する謙虚を勧めながら、その上で人間知性の改善へと向うのである。[26]「わたくしは、人間の傲慢にカピトルやピラミッドを奉献し建立するのではなく、知性のうちに世界を模範として神聖な殿堂をきずくのである。[27]」若いベイコンが自分の好まないアリストテレスを退けた際にも、それが方法のまずさのためであって知力の価値を問うているわけではなかったこと、については先に述べた。[28]

2・2・3 現存の社会目的から孤立した自我のうちにおける観想領域の無限の拡大、不可知に対する傲慢な無知から未知なるものに対する謙虚な知性改善への転換、これら上述のことを具体的に可能ならしめたものは、孤立した自我のうちにおいて新しい観想のきりひらいた社会目的の意識、不可知のうちにおける可知なるものの、既知のうちにおける未知なるものの存在の意識、であろう。これはたんにルネサンスにおけるいわゆる三大発見の結果おのずから生れたものではなく、発見と発明とに対する鋭い洞察にもとづいて現実のものとなったのである。「発明」(inventio) は「考え出すこと」(excogitatio) ではないという洞察である。[29]

この洞察は、すでにエリザベス女王の生誕祝賀のための「礼讃」説話において[30]エリザベス朝特有のあの力のこもった表現で語られている。

「粗大な発明である印刷術、手近なところにあった火砲、以前になかば知られていた羅針盤。これらの三つは最近の世界にいかなる変化をもたらしたことであろう。印刷術は学問の状態を、火砲は戦争の様相を、そして羅針盤は宝石、調度品、航海のやり方を一変した。」つづけて、「しかし、これらの発見はただ偶然にでくわしたものだったのである。したがって、疑いもなく人間の主権は知識のうちにかくされている。多くのものがそのうちに保有されているところのもの、それは、王侯もかれらの財宝によって購うことができず、またかれらの権力によって支配することもできない。かれらの密偵や間諜もそれについては情報を与えることができずかれらの航海者や探検家もその産地に渡航することができない」。そして最後に、「いまわれわれは臆見において (in opinions) 自然を支配しているが、必要においては (in necessity) 自然の奴隷である。しかし、もしわれわれが発明において (in invention) 自然に導かれようとするならば、われわれは活動において (in action) 自然を支配することになろう。[31]」

換言すれば、自然に対する、臆見による傲慢な――「自然を支配する」――態度から発明における謙虚な――「自然に導かれる」――態度への転換が、行動における奴隷から主人への線を基準としてなされたのである。ルネサンス人ベイコンの、行動概念には特別の注意が必要であろう。まず、ベイコンにとって行動はそれが多彩な目的活動であるというだけで喜びとして感じられたと推定される。「われわれの生活のもろもろの活動、企て、野心のうちにはきわだった多様性（varietas）がある。そしてわれわれは登場し、前進し、中休みし、力の増強のために退却し、目標に接近し、ついに到達する等々にしたがって、多大の喜び（voluptas）をもってその多様性を感じとる。」[32] しかし、行動はそれ自身ですでに観想だけのもちうる調和的統一を欠く。「あらゆることで哲学者たちは人間精神を、相反する極端な動き（motus contrarius et extremus）にはあまり慣らさずに、あまりにも統一と調和のとれたものにしようとしすぎた。思うにそれの原因は、かれら自身が実務や他人の拘束義務から免かれた自由な私的生活に耽っていたからである。」[33] 行動に対するベイコンの関心は、行動のもつ「相反する極端な動き」、ひとことでいえば人間生活における災難困難であった。[34] したがって、かれの著作は、かれ自身いうように「暇にまかせて読まれるようなものを暇なときに書くことではない。」その基調は英雄アエネイスの徳や善や幸福についての叙事詩のそれよりもむしろ農耕詩のそれであり、かれ自身適切に「人間精神の農耕詩」（Georgica Animi Humani）という呼び方を好んでいる。[35] それは行動における矛盾に際して「断定の誇示とアカタレプシアの絶望との中間でいっそう思慮ぶかく身を持する」[36] 知識である。それは先に引用の用語を借りていえば、自然にかかわる偶然の事柄のうちに隠されているところのもの、しかもそれが知られれば多くのものがそのうちに保有されているところのもの、王侯の力をもしのぐ人間の力の源泉たりうるところのもの、を知ることである。[37]

2・2・4 いまやわたしたちはベイコンの思想の営みの深部の動きに近づいてきたようである。さきにベイコンの幼時の心を培かったと思われる五穀農穣の女神ケレスの画幅について言及したが[38]、この画幅の示すところのものこそ、かれの「人間精神の農耕詩」としての哲学を一貫するものなのである。すなわち、農耕の発明によって人類史にもたらされたのと同じような人間の条件の変革の期待が将来の学問に託されたのである。その画幅の題字 Moniti Meliora ——それは *Instauratio Magna* の口絵に掲げられた——を解説するかのように、それの第二部 *Novum Organum* のなかでベイコンは次のように言っている。

「発明（inventa）はいわば新しい創造（nova creatio）であり、神の業の模倣（divinorum operum imitamenta）であって、いみじくも詩人が歌ったとおりである。

『むかしみじめな人間たちにはじめて偉大なアテネは波立つ収穫が育つ種子を与えて人間の生活を再創造し法を定めた。』

そしてソロモンが、かつて権力と黄金で力強く、かれの偉業、廷臣、従僕、艦隊で力強く、かれの名声と人類からうけた尊敬とで力強かったのに、これらのいずれをも栄誉とは考えないで、『かくすことは神の栄誉であり、きわめることは王の栄誉である』と言明したことは、注目すべきことのように思われる[39]」。

さきに「発明において自然に導かれる」といわれたことは、ここで示されているように、実は、人間の発明を神の創造の仕事の模倣として把える理解に裏づけされていたのである。ベイコンの壮年期に至るまでの著述の主要部分が宗教的現実に関するものであったことを、ここで想起しなければならない[40]。

2・3 人間の発明・発見が先天的・能動的な理性によって「考え出す」ことでないだけでなく、「神の業の模

倣」であるという理解に裏づけされているとするならば、上述の行動における奴隷から主人への線も、それに照応する自然に対する知識の傲慢な態度から謙虚な態度への転換も、さらにまた現存の社会目的から独立した自我とそのうちに意識された新しい社会目的も、すなわちベイコンにおける行動・自然・社会・自我などの根本概念のすべては、人間による「神の業の模倣」におけるものとして一定の光冠のもとに解釈されなければならないであろう。[41] なぜなら、これらの概念内容もまたそれによって深部から幅広く動かされていたはずだからである。

このようなベイコン解釈の方向は、「産業科学の哲学者」[42]としての唯物論者ベイコンをあまりにも神学的に解釈する意向をもつものとして誤解されるかも知れない。しかし、わたしはただベイコンの時代が宗教と神学を支配的な問題とする時代であったことを卒直に認めるものであり、このような時代において光冠を頂いたベイコンの産業科学の哲学や物質主義の実態を究明しようとする意向をもつにすぎない。この解釈の方向がベイコン諸学説の実際の解釈においていかなる差異を生むかについて、二、三の例示を与えておこう。

まず、ベイコンの有名な「イドラ論」はかれの学説のうちでももっともよく整理されているものの一つである。[43] ところで、ベイコンは、「空虚な臆断」としてのイドラを「被造物につけられた真実のしるし」と対置して、「人間の精神のイドラ」と「神の精神のイデア」という表現をよく用いている。[44] これはたんに表現の問題でプラトン主義からの用語の借用と解されるかも知れない。しかし、造物主＝神の精神のイデアの似姿としての被造物＝自然における刻印という思想は、ベイコンがもっとも意識的に批判の対象としたものであって、表現の問題としては片付けられない。上述のことから、イドラ論全体はいわゆる非実証的観念の誤謬というよりもむしろ人間の傲慢を挫くものとして解釈され、ベイコンの神概念についての問題がその方向においてあらためて提起されるのである。

次に、ベイコン科学哲学における眼目ともいうべき「実験」についても、同様である。ベイコンがこれを語るときにほとんど常に引照される「創世記」の、神が第一日目には光のみを造って他に物質をなに一つ造らなかったという「神の創造の順序」[45]は、これもたんなる文章のあやとして解し去られるべき性質のものではない。なぜなら、魔術をはじめとする人間の諸経験における偶然性に対する批判をとおして「順序」だった実験の概念が形成されるためには、新しい行動や自然の概念が必要であったからである。これはベイコンにおける「業」概念についての問題提起を伴うであろう。

このように見てくると、先述の（2・1）人間精神の統一性、行動の知恵の問題に関しても事情は同様であることが分ろう。シュールは、この精神の統一性のテーゼが語られているベイコンの学問分類論に関して、それが神学に適用されうるか否かは問題であるとしている。[46]これはある一定の立場からのベイコン批判としては成り立つにしても、原典に即したベイコン解釈としては当を得た問題の立て方ではない。なぜなら、「理性」と「啓示」との区別こそかれの学問分類の第一のテーゼであり精神の統一性のテーゼは何よりもまずこの区別との連関で提起されているものだからである。したがって、次には上述のベイコン解釈の方向にそって、かれの学問分類のうちに働いていた諸原理を整理することが必要である。これについては次の機会にゆずらなければならない。

（1）cf. K. FISCHER, *Fr. Bacon*, 1856, P.232 sq.
E. A. ABBOTT, *Francis Bacon*, 1885, p.461 sq.
F. H. ANDERSON, *The Philosophy of Francis Bacon*, p.163 sq.
これに関しては、(1)数学的天文学の外にベイコンが数学主義的と見なすプロクロス形而上学の復興(2)力学系以外の自然科学の諸系の研究史、との関係において追究されるべきであろう。
（2）*La synthèse, Idée-force dans l'evolution de la pensée*, p. 36.
（3）ケンブリッジ＝プラトン派は、ルネサンス＝プラトン主義

との関係でベイコンを位置づけるために避けられないものであるが、一般にはロック本有観念批判の対象として以外あまり関心をもたれていないので一言しておく。J. TULLOCH のイギリス合理神学・キリスト教哲学の研究書中のケンブリッジ＝プラトン派そのものの研究（1872）をはじめとして J. H. MUIRHEAD のイギリス＝プラトン主義史中の位置づけ（1932）まで、史的研究が全くないわけではない。しかし、本来の哲学史研究では、部分的にロックとの関係（G. von HERTRING, 1892）ライプニッツとの関係（W. FEILCHENFELD, 1923）デカルトとの関係（BRÉHIER, 1937）を明らかにしたものがあるだけで、ケンブリッジ＝プラトン派に対する関心は前世紀末（P. JANET, 1860 ; J. FREUDENTHAL, 1891, 1893 ; G. N. DOLSON, 1897）以来全くうすれてしまっている。イタリア＝ルネサンス人文主義と十八世紀ドイツ人文主義とを結びつける脈絡を構想した E. CASSIRER, *Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge*, 1932 (English translation, 1953) もまだ大きな反響をうんでいるとはいえない。最近の J. A. PASSMORE, *Ralph Cudworth* 1617～1688, 1951 は未刊行の手稿を使っている点で貴重である。なお、普及本に見かける「モア―カルヴィン教徒」（例えば *Dictionnaire des philosophes, Seghers*, 1962）はモアの父がカルヴィン教徒であったことの、また「カドワース『道徳上の善悪について』一七三一年刊行」（例えば日本語訳フォールレンデル『西洋哲学史』第二巻）は *A Treatise concerning Eternal and Immutable Morality* の、間違いであろう。

（4）1・2・1～2参照。

（5）「フランシス・ベイコン研究（一）」（本紀要第一一号、以下では「研究（一）」として引用する。

（6）「研究（一）」、七〇、七四、七五、七七ページ参照。

（7）*D. A.*, Ⅷ, 2 (vol. Ⅰ, p. 771)。

これは事件処理の術（Doctrina de Occasionibus）とともに実務の学（Doctrina de Negotiis）の二部門をなす。

cf. *A. L.*, Ⅱ, 23. 12. *The Essays*, 1. ed. 10. of Negociating (2. ed.. 33. ; 3. ed., 47.) ; 2. ed., 28. Of Fortune (3. ed. 47.)

「研究（一）」によって本文学部所蔵の *Works* (1803) における主要著作の位置が明らかになったから、これからは以下の略号で引用することにする。

㈠ DE AUGMENTIS SCIENTIARUM, Liber, Caput＝*D. A.*,〔ローマ数字〕、〔アラビア数字〕

㈡ NOVUM ORGANUM, Liber, Aphorismus＝*N.O.*,〔ローマ数字〕、〔アラビア数字〕

㈢ THE ADVANCEMENT OF LEARNING ＝ *A.L.*,〔W. A. Wright 版の章節数〕

(四) 必要と思われる場合には Spedding, Ellis, Heath 版 *Works* による巻数・ページ数を付する。

(8) 『延臣論』トマス・ホビー (Thomas Hoby) 英語訳は一五六一年。ベイコンはアキアヴェッリを多くの個所で賞讃している。例えば「人間のなすべきことではなしに人間がなすを習わしとしていること (quid homines facere soleant, non quid debeant) を公然と偽りなく曝露しているところのマキアヴェッリやその他同様の妙想をもった著者たちにわれわれは感謝の意を表わすべきである。」*D. A.*, Ⅷ, 2 (vol. Ⅰ, p.729).

(9) 「本研究（一）」，六九，七〇，七四，七六ページ参照。

(10) Cogitata et Visa (vol. Ⅲ, p.611).
cf. *N.O.*, Ⅰ, 129; De interpretatione naturæ : proœmium (vol. Ⅲ, p.518 sq.).

(11) *Instauratio Magna*, Franciscus de Verulamio sic cogitavit (vol. Ⅰ, p.122). ここにいう「功績」が神の報酬に値するそれを意味することは文脈から明らかである。またここの反「成果」主義は，いわゆる「実りの実験」に対する「光の実験」の思想に連なるといえよう。

(12) 「研究（一）」，六九，七二，七四，七六，七八ページ。

(13) To my Lord Treasurer, Burghley, 1591 (vol. Ⅲ p.108—109). 「二種類の源泉」とは自然哲学におけるギリシャ人の哲学と錬金術者のそれとである。cf. Praise of Knowledge, 1592 (vol. Ⅲ, p. 124). なお学問の仕事をベイコンは好んで鉱山にたとえている。cf. *N.O.*, Ⅰ, 90.

(14) cf. *N. O.*, Præfatio (vol. Ⅰ, p.153) ; *N. O.*, Ⅰ, 81 ; 115; 128.

(15) *N. O.*, Ⅰ. 35. 「原理についても論証についても一致を欠いているかぎり，論争は成り立たない。」*N. O.*, Ⅰ, 61. これと関連して当時の学問研究教育施設の批判については，cf. *N.O.*, Ⅰ, 90.

(16) cf. Descriptio globi intellectualis (vol. Ⅲ, p.727 sq.); *N.O.*, Ⅰ, 72.

(17) Cogitata et Visa (vol. Ⅲ, p.613) . cf. *N. O.*, Ⅰ, 84; Parasceve ad Historiam naturalem et experimentalem, Ⅳ (vol. Ⅰ, p. 398).

(18) cf. *Instauratio Magna*, Præfatio (vol. Ⅰ, p.125). ベイコンはヨロンブスが大西洋横断前に新大陸発見の理由を述べていることに注目し，それになろうとしている。*N. O.*, Ⅰ, 92.

(19) cf. *N. O.*, Ⅰ, 93 ; *D. A.*, Ⅱ, 10 (vol. Ⅰ, p. 514).

(20) 「研究（一）」，七〇ページ参照。cf. *N. O.*, Ⅰ, 78; 84; 122. *D. A.*, Epistola Dedicatoria (vol. Ⅰ, p.123) . *A. L.*, Ⅰ, 4. 12.

(21) グランヴィルはケンブリッジ＝プラトン主義とベイコン経験主義との総合者として問題的な立場にたっている。

Plus Ultra を『超過激論者』と訳すのは適当でない。

(例えば、E・ツィルゼル他著、下村寅太郎序、渡辺正雄他訳『科学革命の新研究』一五八ページ)。

(22) *N. O.*, I, 49 ; 83 ; 122.

(23) ベイコンは、その傲慢さを「自分の発見の無力を転嫁して、自然そのものを誹謗する」ことに見いだしている。*N.O.*, I, 75. cf. *Instauratio Magna*, Præfatio (vol. I, p.127).

(24) *Instauratio Magna*, Præfatio (vol. I, p.133).

(25) ウィレーもこの点を強調している。『一七世紀の思想的風土』第三章参照。深瀬訳に*De Augmentis* を「論証について」と訳しているのは不注意な誤りであろう。

(26) この改善が、手に対する道具と同様の、知力に対する方法の考案であったことは、いうまでもない。これがベイコン方法論の発想の根拠である。詳細は別の機会に明らかにする。

(27) *N.O.*, I, 120. cf. *N.O.*, I, 123.

(28) 「研究(一)」六九ページ。この批判の仕方がその後も一貫していることは *N. O.* 中の有名な「イドラ論」における批判方法を見ても明らかである。特に、cf. *N.O.*, Præfatio (vol. I, p.153) ; I. 32 ; 61 ; 122.

(29) *Instauratio Magna*, Præfatio (vol. I, p.130).

(30) Praise of Knowledge, 1592 (vol. Ⅷ, p.125—126) なお「研究(一)」、七〇—七一ページ参照。

(31) なお火砲、絹糸、羅針盤、印刷術その他の発見に対するベイコンの所見については、cf. Cogitata et Visa (vol. Ⅲ, p.611—615) ; *N. O.*, I, 109 ; 129. これらが普通いわれるベイコンの「知は力なり」の最も輝かしい表現であるが、なお、その本質的内容である、知識を媒介としての、発明の偶然性から必然性への転化の思想は、その後の全著作を貫くものである。cf. *N. O.*, I, 8.

(32) *D. A.*, Ⅶ, 2 (vol. I, p.723). なお、ベイコンは、ものごとに成功しない危険よりもものごとを試みない危険の方が比較にならぬほど大きい、といっている。*N. O.*, I, 114.

(33) *D. A.*, Ⅱ (vol. I, p.726).

(34) ベイコン帰納法における「否定的事例」もこれの系として解釈することができるであろう。

(35) *D. A.*, Ⅶ, 1 (vol. I, p.715). cf. To Isaac Casaubon, 1609 (vol. XI, p.146). なおベイコンはアテネの哲学者たち特にプラトンを「世間知らずの若者に物語るひまな老人」とやゆしている。*N. O.*, I, 71.

(36) *N. O.*, Præfatio (vol. I, p.151). cf. *N. O.*, I, 67;121.

(37) それは、アカタレプシアに対してエウカタレプシア (Eucatalepsia) と呼ばれ、「必要であるかぎりは知りながら、かつ完全に知りつくしてはいないと考えることは、完全に知りつくしていると考えながら、かつ必要であることを何も知らない

にとより、まさっている」といわれる。*N. O.*, I, 126.

(38)「研究（一）」、六八ページ参照。

(39) *N. O.*, I, 129. 引用文中の二つの引用はそれぞれ LUCRETIUS, *De rerum natura*, vi, 1—3 および *Prov.* xxv. 2 からのものである。

(40)「研究（一）」、七〇、七一ページ参照。

(41)「研究（一）」に言及されているベイコン哲学思想におけるカルヴィニズム的傾向の内容整理とその解釈は後日にゆずらねばならない。これは、イタリア＝プラトン主義からケンブリッジ＝プラトン主義への思潮との対比でベイコンを見る場合には最大の問題の一つとなろう。

(42) cf. B. FARRINGTON, *Francis Bacon, Philosopher of Industrial Science*, 1949.

(43) cf. K.FISCHER, *op.cit.*, p.109sq.; F. H. ANDERSON, *op. cit.*, p.97sq.

(44) cf. *N. O.*, I, 23; 124.

(45) *Instauratio Magna*, Præfatio. cf. *N. O.*, I, 70; 82; 121.

(46) cf. P.-M. SCHUHL, *Bacon*, p.37.